

東京大学総合図書館シリーズイベント「東大研究者の本棚」

展示図書リスト

図書館を読む

～政治学者・苅部直の遍歴

---

展示期間：2022年5月10日（火）～8月末予定

場所：総合図書館本館3階ホール

「ぼくはこんな本を読んできた」と誇らしげに気取るつもりはない。書目をご覧になればわかるように、若い方々に紹介する本の一覧としては、いかにも貧弱である。しかし、1965年に生まれた一教員がこれまで、どのような本と出会い、図書館といかにつきあってきたか。それを伝えることも、学生が今後、図書館を利用しながら書物にふれてゆくための参考として、また時代の移り変わりを知る手がかりとして役に立つのではないか。そんなことを考えながら、これまでの人生で、図書館と関わりながら読んできた本のいくつかを紹介してみたい。

## 1 子供時代（小中学校まで）：自宅と北区立図書館

生まれたのは1965年3月6日。いまもある都立駒込病院での出産だったが、無事というわけにはいかなかった。予定よりもかなり早く生まれたため瀕死の状態にあり、東大病院へ緊急搬送。3か月ほど入院することになった。当時、最新鋭の保育器が到着していたおかげで命びろいしたのである。東京大学とは生後まもなくから縁があったことになるが、その経験があるので、テクノロジーの発展が他面で多くの弊害を引き起こしている事実は認めながらも、その進歩自体は望ましいものだという確信を持ちつづけている。

自宅があったのは東京都北区の東十条。十四歳のときからは上十条の家に引っ越した。そのあたりの地域の雰囲気については、『江藤淳<sup>1</sup>——終わる平成から昭和の保守を問う』（2019年）に寄稿した「十条の江藤淳」という文章で紹介したことがある。江藤が十条に住んでいたのは終戦直後だから、実家の家族とは時期が重なっていないが、江藤が暮らしていた銀行社宅の跡地は奇しくも、上十条の家のはす向かいであった。江藤は回想のなかで、終戦直後の殺伐とした空気に覆われた場末の地区として、このあたりを描いている。そこまで荒んだ場所ではないと思うものの、たしかに高級な住宅街とはいいがたい。映画好きの人は、柳町光男の監督作品『十九歳の地図』<sup>2</sup>（1979年）を観てみるといい。全篇、その近辺でロケを行って撮影されており、暗い内容ではあるものの、自分にとっては子供時代に慣れ親しんだ風景に再会できる貴重なフィルムである。近況を描いた

---

<sup>1</sup> 江藤淳（1932-1999）文芸評論家。『小林秀雄』（1961）『漱石とその時代』（1970）など。

<sup>2</sup> 原作「十九歳の地図」『中上健次全集 1 初期小説集』（集英社、1995）所収。

傑作に清野とおるの漫画『さよならキャンドル』1（講談社、2021年）があるが、これはちょっと展示しにくい（なぜそう言うのかは買って読んでみればわかる）。

中島岳志・平山周吉監修『江藤淳——終わる平成から昭和の保守を問う』（河出書房新社、2019年）

実家はとにかく本が多かった。すべての部屋と廊下に本棚があった。亡父がもとは研究者で、それを辞めて公務員になったせいであるが、しかしいま思えば安月給であれほど多くの本を買えるはずがないから、おそらく誰かの蔵書を一括で譲りうけたのだろう。したがって、人生で初めてふれた図書館は、広い意味でいうなら自宅ということになる。当時、家の本棚にあって、記憶に残っている本を三点。『漢字の起原』は父の指導教官だった加藤常賢<sup>3</sup>の著書。『外国人のための漢字辞典』は父が編集に携わった本である。

加藤常賢『漢字の起原』（角川書店、1970年）

文部省編『外国人のための漢字辞典』（大蔵省印刷局、1966年）

しかし当然に、子供が漢籍や専門書に興味をもつはずはない。動植物の図鑑や妖怪図鑑を偏愛していたから、漢和辞典の挿絵をひたすらチェックして眺めていたのを憶えている。そうした興味から目を通した本に『十二支物語』があった。また、おそらく父の公務員としての仕事の関係で、美術展の図録が大量にあった。そのなかでいまでも鮮烈な印象が残っているのが、朝日新聞東京本社企画部編『現代の幻想絵画展：不安と恐怖のイメージを探る<sup>4</sup>』（1971年）。これは駒場博物館に所蔵されているが、子供心にトラウマのように残った藤野一友<sup>5</sup>の絵「抽象的な籠」（1964年）は、その後フィリップ・K・ディック<sup>6</sup>のSF小説『ヴァリス』<sup>7</sup>の邦訳文庫本の表紙にも使われたから、思い当たる人も多いだろう。

---

<sup>3</sup> 加藤常賢（1894-1978）中国哲学者、東京大学文学部教授。

<sup>4</sup> 会期・会場：1971年11月5日-16日 新宿・小田急百貨店、1972年2月5日-2月9日 丸栄百貨店、1972年2月25日-3月1日 そごう神戸店、出品作家：藤田吉香、藤野一友、藤林叡三ほか、主催：朝日新聞社。

<sup>5</sup> 藤野一友（1928-1980）画家、シュルレアリスト。

<sup>6</sup> フィリップ・K・ディック（1928-1982）アメリカのSF作家。『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』『高い城の男』など。

<sup>7</sup> 大瀧啓裕訳『ヴァリス』（サンリオ、1982）（再刊 東京創元社、1990）。

諸橋轍次『十二支物語』（大修館書店、1968年）



『十二支物語』と図版出典の一つ『欽定古今圖書集成』  
(総合図書館所蔵)

さて図書館である。学習塾や家庭教師には無縁で、小学生時代には宿題を片付けるほかは「勉強する」という行為をまったくやらない子供だったので、本を読む時間もテレビを見る時間も潤沢にあった。いまから思えば、自分の過去に乱読時代と呼べる時期があったとすれば、小中学生のころがもっともそれに適合する。

お小遣いが潤沢だったわけではないので、本を手に入れるのは図書館と古本屋が中心になる。学校図書館はあまり記憶になく、憶えているのは北区立中央図書館（現在とは違う場所）である。1970年代なかばは、オカルト、UFOブームのさなかであった。当時読んだような妖怪・幽霊本の類は、さすがに総合図書館の蔵書にないので、その後の時期に出た関連書や、もっと大人になってから読んだ本を挙げる。澁澤龍彦<sup>8</sup>の本は、おそらく当時はサド裁判<sup>9</sup>の余波があったのだろう、公立図書館では見かけなかったと思う。その代わりに種村季弘<sup>10</sup>の著書を図書館で借りてよく読んだ。思えばこれが、文学や美術へのい

<sup>8</sup> 澁澤龍彦（1928-1987）フランス文学者、評論家、小説家。

<sup>9</sup> サド裁判（1961-1969）澁澤が翻訳したサド『悪徳の栄え（続）』（現代思潮社、1959）が猥褻文書とされ最高裁判所まで争った裁判。事件番号：昭39（あ）305  
[https://www.courts.go.jp/app/hanrei\\_jp/detail2?id=50747](https://www.courts.go.jp/app/hanrei_jp/detail2?id=50747)

<sup>10</sup> 種村季弘（1933-2004）ドイツ文学者、エッセイスト、文芸評論家。

い道案内にもなったのである。なお今回展示の『魔法』は、のちにお世話になる廣松渉<sup>11</sup>先生の旧蔵書。

水木しげる<sup>12</sup>『妖怪画談』正、続（岩波新書、1992-1993年）

K・セリグマン『魔法（世界教養全集20）』（平凡社、1961年）

澁澤龍彦『夢の宇宙誌』（美術出版社、1964年）

種村季弘『詐欺師の楽園』（白水社、1979年）

こういった嗜好だから、よむ小説もミステリーやSFが中心になる。シャーロック・ホームズ物や江戸川乱歩の少年探偵団シリーズ<sup>13</sup>、また星新一や筒井康隆（の子供むけ作品）から読み始め、しだいに大人向けの小説へ読み進んだのは、多くの人がもっている共通体験だろう。当たり前であるが、そうした書目は総合図書館の蔵書には見あたらない。かろうじて見つかったのがエドガー・アラン・ポー<sup>14</sup>の作品。大学時代に、馬場康雄<sup>15</sup>先生（ヨーロッパ政治史）を囲んだ宴席で「ポーの小説で何が一番好きか」が話題になったことがある。自分が挙げたのは「ちんば蛙」。もっとも陰惨な作品である。ちなみに馬場先生が挙げたのは「鋸山奇譚」で、無難でカッコいい選択に、ずるいと思ったものだった。

佐伯彰一ほか編『ポオ全集』第1巻（東京創元社、1969年）

いわゆる古今東西の名作と言われるような小説は、こういうわけでほとんど読んでいない。誰もが読む夏目漱石も、現在に至るまで通読したのは作品の半分くらいだろう。子供時代に好きだったのは芥川龍之介だが、これも『河童』から読み始めたと思うので、やはり妖怪つながりの気配がある。そのほか中学時代に読んでいた作家の一人は三島由紀夫

---

<sup>11</sup> 廣松渉（1933-1994）哲学者、東京大学教養学部教授。旧蔵書の一部は総合図書館所蔵。

<sup>12</sup> 水木しげる（1922-2015）漫画家。『ゲゲゲの鬼太郎』は1968年以降、複数回にわたってテレビアニメ化された。

<sup>13</sup> 江戸川乱歩の少年少女向け推理小説シリーズ。第1作『怪人二十面相』（1936）が人気を博しシリーズ化。1950年代以降、映画化、テレビドラマ化された。

<sup>14</sup> エドガー・アラン・ポー（1809-1849）アメリカの詩人、小説家、批評家。『大鴉』『黒猫』『モルグ街の殺人』など。

<sup>15</sup> 馬場康雄（1948-）

16. 造本としては、いま出ている決定版全集<sup>17</sup>よりも旧版全集の方が、本文を旧漢字で組んでいて、装訂（三島の岳父、杉山寧による）にキッチュな美感があるので好みである。『定本三島由紀夫書誌』は、近所の古本屋にずっと置いてあった（もちろん買える値段ではない）ので、よく記憶している。

『芥川龍之介全集』第十四卷（岩波書店、1995-1998年）

『三島由紀夫全集』第一卷（新潮社、1975年）

島崎博・三島瑤子編『定本三島由紀夫書誌』（薔薇十字社、1972年）

読書生活以外のことは今回の選書の対象外であるが、中学時代には淀川長治<sup>18</sup>のラジオ番組を愛聴し、テレビで平日夕方にやっている洋画劇場を楽しみに観ていた。いまだに映画に関する知識のかなりの部分を、このころの見聞が占めている。自伝が幸いに総合図書館の末延文庫<sup>19</sup>に収蔵されていた。

『淀川長治自伝』上（中央公論社、1985年）

---

<sup>16</sup> 三島由紀夫（1925-1970）小説家、劇作家。『金閣寺』『豊饒の海』など。

<sup>17</sup> 『三島由紀夫全集 決定版』全42巻（新潮社、2000-2006）。

<sup>18</sup> 淀川長治（1909-1998）映画評論家。『日曜洋画劇場』（NETのちにテレビ朝日）で1966年の放送開始から1998年まで解説を務めた。

<sup>19</sup> 東京大学法学部教授・附属図書館長を務めた末延三次（1899-1989、館長在任 1953-1960）の旧蔵図書。分野は英米法関係を中心に、法律、政治から文学、歴史、芸術まで、多岐に渡る。



## 2 文京区立図書館の時代（高校時代）

高校が文京区にあったので、区内の二、三の図書館にはとてもお世話になった（真砂中央図書館、本郷図書館に関しては現在もそうである）。これは本だけではなく、レコードライブラリーが充実していたので、複数の館を回って借りだしていたのである。このこととも関連するが、高校時代に入ると読書冊数が少なくなり、範囲も狭くなる。オーケストラ部の活動に精を出していたので、本を読むよりも楽譜を眺める時間の方が多かった。『モーツァルトの交響曲ト短調 K.550』<sup>20</sup>は、当時出たばかりの、詳しい解説つきのスコア。丸山眞男<sup>21</sup>の旧蔵書を整理したときに、この本があるのを見つけて、やはり刊行時に注目された本だったのだなと思った。『楽譜の風景』を読んだのはもっと後の時期になるが、この関連で思い出深い一冊。

ネイサン・ブローダー編『モーツァルトの交響曲ト短調 K.550』（東海大学出版会、1979年）

無量塔蔵六『ヴァイオリン』（岩波新書、1975年）

岩城宏之『楽譜の風景』（岩波新書、1983年）

中学時代からの継続であるが、全集を通読したほぼ唯一の作家が、北杜夫<sup>22</sup>。当時は同じような軽妙エッセイ作家として知られていた遠藤周作<sup>23</sup>については、エッセイ以外に読み進むことがなかったから、やはり波長が合ったのだろう。そこから北が偏愛するトーマス・マン<sup>24</sup>を読むことになる。「トーニオ・クレーゲル」の主人公になったつもりで「君たち俗人とはわかりあえないんだ……」とか思っていたのだから、客観的には馬鹿である。

北杜夫『楡家の人びと』（新潮社、1964年）

『トーマス・マン全集』第8巻（新潮社、1971年）

---

<sup>20</sup> 1788年完成。モーツァルトには珍しい、短調の交響曲として有名。

<sup>21</sup> 丸山眞男（1914-1996）政治学者（日本政治思想史）。東京大学法学部教授。

<sup>22</sup> 北杜夫（1927-2011）小説家。『どくどくマンボウ航海記』『夜と霧の隅で』など。

<sup>23</sup> 遠藤周作（1923-1996）小説家。『海と毒薬』『沈黙』、エッセイ「狐狸庵」シリーズなど。

<sup>24</sup> トーマス・マン（1875-1955）ドイツの作家。『ブデンプローク家の人々』『魔の山』など。

そしてよく読んだのが吉行淳之介<sup>25</sup>。同じ戦後文学でも大江健三郎<sup>26</sup>や埴谷雄高<sup>27</sup>には行かず、こちらに向かったことが、その後の読書傾向を決めている気がする。エロへの関心も当然あっただろう。さすがというか、総合図書館には『暗室』のジョン・ベスター<sup>28</sup>（当時、高校生むけの英語教材でも活躍していたはず）による英訳本が収蔵されている。『酒について』は、なぜこんな洒落な本が総合図書館に？と思ったが、やはり末延文庫本。この中に、二日酔いのなかで最も深刻で辛いのは「形而上学的二日酔い」（metaphysical hangover）だという記述が出てくる。高校生のころは意味がわからなかったが、大人になってから飲酒したある日の翌朝、この場合の metaphysical の physical は、「形」ではなくて身体のことだと痛感して腑に落ちた（そう説明しても意味がわからない人は、幸福だと思う）。

**Junnosuke Yoshiyuki, *The Dark Room* (Kodansha International, 1975)**

キングズリイ・エイミス<sup>29</sup>（吉行淳之介・林節雄訳）『酒について』（講談社、1976年）

幻想文学やサブカルの趣味はもちろん高校生時代も続いていたが、このころ熱心に読んでいたのは中井英夫<sup>30</sup>。北区出身、高校の大先輩というつながりもある。当時、文京区立小石川図書館で読んだ一卷本の作品集が、総合図書館にもあるのはありがたい。武満徹<sup>31</sup>による装訂である。『羊をめぐる冒険』をきっかけにして、高校時代の終わりごろから村上春樹<sup>32</sup>の作品を読むようになったが、幻想文学のように楽しんでいったと思う（なので『ノルウェイの森』<sup>33</sup>にがっかりした）。

---

<sup>25</sup> 吉行淳之介（1924-1994）小説家。『砂の上の植物群』『夕暮れまで』など。

<sup>26</sup> 大江健三郎（1935-）小説家。『万延元年のフットボール』『燃え上がる緑の木』など。

<sup>27</sup> 埴谷雄高（1909-1997）小説家、評論家。代表作『死霊』。

<sup>28</sup> ジョン・ベスター（Bester, John 1927-2010）日本文学翻訳家。宮沢賢治、三島由紀夫、大江健三郎らを海外に紹介。

<sup>29</sup> キングズリイ・エイミス（Amis, Kingsley 1922-1995）イギリスの作家・評論家。代表作『ラッキー・ジム』（1954）。

<sup>30</sup> 中井英夫（1922-1993）小説家。『虚無への供物』『悪夢の骨牌』など。

<sup>31</sup> 武満徹（1930-1996）作曲家。『弦楽のためのレクイエム』（1957）『ノヴェンバー・ステップス』（1967）など。

<sup>32</sup> 村上春樹（1949-）小説家、翻訳家。『風の歌を聴け』『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』など。

<sup>33</sup> 『ノルウェイの森』（講談社、1987）『村上春樹全作品：1979～1989』第6巻所収。



『中井英夫作品集』（三一書房、1969年）

『村上春樹全作品2 羊をめぐる冒険』（講談社、1990年）

高校時代に読んでいて、その後はあまり読んでいないジャンルに詩がある。谷川俊太郎<sup>34</sup>は、はじめはスヌーピーとチャーリー・ブラウンが活躍する漫画『ピーナッツ』<sup>35</sup>の訳者として、名前を知った。萩原朔太郎<sup>36</sup>を読むようになったのはどうしてだったか。猫を飼っていたから『青猫』か『猫町』が入口になったのだろうか。『純情小曲集』は初刊本が総合図書館にある。

『谷川俊太郎詩集』（思潮社、1965年）

萩原朔太郎『青猫（名著復刻詩歌文学館）』（日本近代文学館、1980）

『純情小曲集』（新潮社、1925年）

こういう風に読書遍歴を書いていくと、単なるエッセイ少年かサブカルオタクの自己形成ということになりそうである。実際、政治・社会への関心は薄い方だったし、歴史はきっぱりと嫌いだった。それが徐々に変わっていったきっかけの一つは、高校の授業だったのではないか。『水俣病』は地理の、『動物農場』は英語の夏休みの宿題として読んだのである。『動物農場』の英語原書は総合図書館にはないが、文学部西洋史研究室には1989年にモスクワで刊行されたロシア語訳がある。ソ連のペレストロイカ<sup>37</sup>のもとの言論自由化のなかで公刊されたのだろう。初刊の直後に出た難民むけのウクライナ語版にオーウェル<sup>38</sup>が序文を書きおろしていることを考えあわせると、感慨ぶかい。

原田正純『水俣病』（岩波新書、1972年）

ジョージ・オーウェル（川端康雄訳）『動物農場』（岩波文庫、2009年）

---

<sup>34</sup> 谷川俊太郎（1931-）詩人。『二十億光年の孤独』（1952）『日々の地図』（1982）、訳書に『マザー・グースのうた』（全5巻）など。

<sup>35</sup> チャールズ・シュルツ著 谷川俊太郎訳『完全版ピーナッツ』全25巻（河出書房新社、2019-2020）。

<sup>36</sup> 萩原朔太郎（1886-1942）詩人。『月に吠える』『純情小曲集』など。

<sup>37</sup> ペレストロイカ（1985-1991）はゴルバチョフ政権のもとで行われたソビエト連邦の政治・経済改革。

<sup>38</sup> ジョージ・オーウェル（Orwell, George 1902-1950）イギリスの小説家、エッセイスト。『カタロニア讃歌』『一九八四年』など。ウクライナ語版『動物農場』は1947年刊。この序文は今回展示の岩波文庫版に収録。

高校時代に読んだ本のなかで、現在の専門に近いものを挙げると、下記の4冊ということになる。立派なサヨクの出来上がりという気配があるが、当時は米ソ間が緊張する新冷戦真っ盛りの時期だったから、社会問題に関心を持ち始めた若い人は、右翼に走らないかぎりこういう読書傾向になるのが当然だったと思う。ここに展示した『社会発展史入門』は、日本中世史の大家、永原慶二<sup>39</sup>（一橋大学教授を務めた）の旧蔵書。マルクスの歴史理論を知るための必読文献である『資本主義的生産に先行する諸形態』は廣松渉先生の旧蔵書で、先生の哲学の形成過程を窺わせる貴重な書き込みがある。『哲学に何ができるか』は、初めて読んだときから内容の出来がよくないと感じていたが、哲学への関心のきっかけになった本として、自分にとっては大事な一冊。『ファシズム』は学内で10の図書館・室が所蔵していることが、当時注目された本だった事実を示している。この本のおかげで、ハンナ・アレント<sup>40</sup>は悪辣な保守反動思想家だとしばらく思っていた。

安藤貞男『社会発展史入門』（新日本新書、1977年）

カール・マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』（大月書店・国民文庫、1963年）

廣松渉・五木寛之『哲学に何ができるか』（朝日出版社、1978年）

山口定『ファシズム』（有斐閣、1979年）

こんな本ばかり読んでいたせい、ということもないのだが、大学に入る前に1年、足踏みすることになった。しかし結果から見ればそれもいい経験だったと思う。このあたりから、現在の専門に深く関連する本が登場する。『ニーチェの顔』は高校時代だったかもしれない。最初はワーグナー<sup>41</sup>との関連で興味をもったのである。『精神的考察』は、一度目の受験のさいに、共通一次試験（現在の大学入学共通テスト）の国語問題に使われたので、内容とは別の面で思い出ぶかい。『デュルケムとウェーバー』の折原浩<sup>42</sup>先生には、そのあと大学1年のころからゼミでお世話になることになる。『昭和期日本の構造』は第3章を初出の本、河野健二編『1930年代の日本—現代への教訓』（大阪書籍、

---

<sup>39</sup> 永原慶二（1922-2004）

<sup>40</sup> ハンナ・アレント（Arendt, Hannah 1906-1975）政治学者、哲学者。ドイツ生まれ、アメリカに亡命。『全体主義の起原』『エルサレムのアイヒマン』など。

<sup>41</sup> リヒャルト・ワーグナー（Wagner, Richard 1813-1883）ドイツの作曲家。バイロイト祝祭劇場を創設。歌劇『タンホイザー』『トリスタンとイゾルデ』『ニーベルンゲンの指輪』など。

<sup>42</sup> 折原浩(1935-)

1983年)で読んだ。丸山眞男の本で最初に読んだのは、当時最新刊だった『後衛の位置から』。本は新しく出たものの方が良いという妄念に、まだとらわれていたのである。

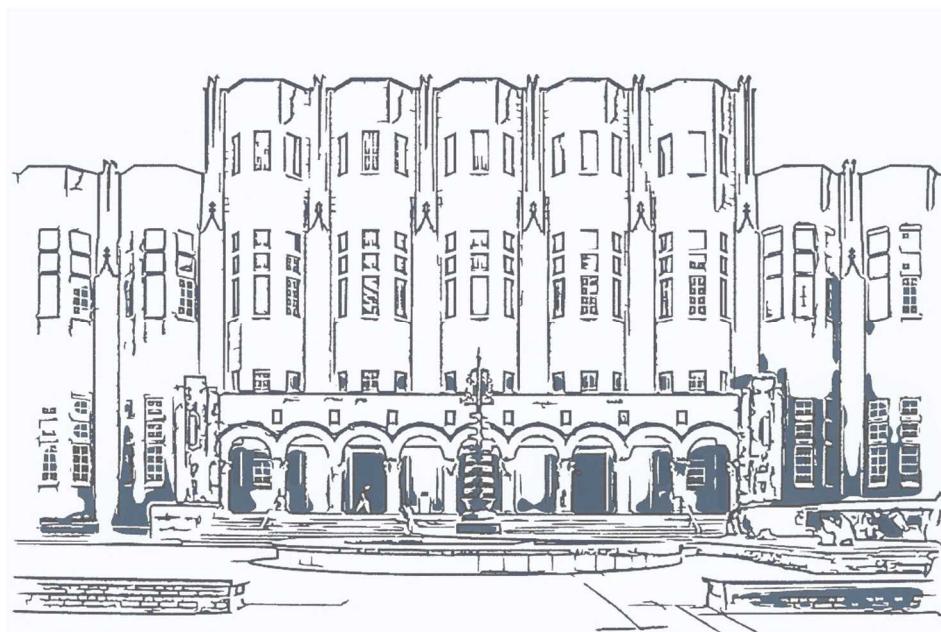
氷上英廣『ニーチェの顔』（岩波新書、1976年）

藤田省三『精神史的考察』（平凡社、1982年）

折原浩『デュルケームとウェーバー』上下（三一書房、1981年）

筒井清忠『昭和期日本の構造』（有斐閣、1984年）

丸山眞男『後衛の位置から』（未来社、1982年）



### 3 大学図書館の時代

1984年に入学してから、東京大学の図書館・室にお世話になり続けて、すでに38年にわたる。利用者のなかではかなり年季の入った方だろう。つい最近、本郷でこんなものを見たという記憶が、よく考えると20年くらい前だったりするので、読書の記憶も現在と地続きになってしまう。また大学時代からは自分でも本を買うようになったので、読書生活は「図書館と私」というテーマからはみだしてくる。

そこでここではまず、東大図書館と関連の深い書目ということで、学部学生・大学院生時代にゼミでお世話になり、思想史研究の手ほどきを受けた先生方の著書を挙げる。本を開いてみればわかると思うが、それぞれに独特の研究手法と、著作の文体をもった方々である。

渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会、1985年）

平石直昭『荻生徂徠年譜考』（平凡社、1984年）

佐々木毅『政治学は何を考えたか』（筑摩書房、2006年）

北川東子『ジンメル 生の形成』（講談社、1997年）

佐藤正英『歎異抄論釈』（青土社、2005年）

義江彰夫『神仏習合』（岩波新書、1996年）

それから、総合図書館ならではの珍しい例を。森鷗外文庫をはじめとして、著名な知識人の旧蔵書もこの図書館には多い。その一つとして哲学者の廣松渉先生の旧蔵書群があり、場合によっては先生ご自身による書き込みが見られる。宇野弘蔵<sup>43</sup>の著書はその例で、『資本論の哲学』<sup>44</sup>（1974年）の形成過程を伝える史料として貴重である。これはご本人の筆跡だということが、ゼミで目撃した黒板の字の記憶からわかる。

宇野弘蔵『マルクス経済学原理論の研究』（岩波書店、1959年）

---

<sup>43</sup> 宇野弘蔵（1897-1977）マルクス経済学者。東京大学社会科学研究所教授。『経済政策論』『資本論入門』など。

<sup>44</sup> 現代評論社刊。新版（勁草書房、1987）、平凡社ライブラリー版（2010）。

日本の古典籍の写本・刊本の所蔵先を教える『国書総目録』<sup>45</sup>は、現在は国文学研究資料館のウェブサイト上のデータベース<sup>46</sup>として公開されているので、分厚い本を利用する必要はなくなった。だがかつては前近代のテキストを研究するさいには、まず引かなくてはいけない基本参考文献だったのである。総合図書館にある書籍版には、レファレンスサービスを担当していた職員の方が、間違いを訂正し、情報を追加した書き込みが豊富に見られる。利用者のために、いまで言えばデータベースのリニューアルをこつこつとやっていたのだろう。職員の方々の、裏方としてのこうした地道な努力のおかげで、図書館が生き続けていることを知ってもらいたい。

### 『国書総目録』全8巻・著者別索引（岩波書店、本巻1963-1972年、索引1976年）



請求記号などが書き込まれた『国書総目録』

<sup>45</sup> レファレンスデスクで使用されていた書き込みのある『国書総目録』は、現在は事務室に保管されている。

<sup>46</sup> 日本古典籍総合目録データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>



## 4 海外・外国語出版の系譜

今回の展示では、自分で手がけた著書・編著のほかに、外国語に訳された著書も並べることにした。その関連で、これまで日本の人文・社会科学系の研究書が外国語で出版された例をいくつか紹介する。文系の研究者はグローバルな発信の努力が乏しいと言われることがあるが、東京大学に限ってみても、日本人教員で外国語による著書を刊行した人は、戦前からいたのである。

中国哲学の服部宇之吉（1867-1939）は、北京の大学堂<sup>47</sup>、ハーヴァード大学でも教えた元祖グローバル研究者であり、その著書『儒教と現代思潮』（1918年）の中国語訳が1934年に上海で刊行されている。アメリカで1928年に刊行された神話学の体系書には、宗教学者の姉崎正治<sup>48</sup>（東大図書館長も務めた）が、日本神話の概説を寄稿している。矢代幸雄（1890-1975）は旧制第一高校教授を務めた西洋美術史家。フィレンツェに留学し、ロンドンで出版した著書で学界デビューをはたしているが、*Sandro Botticelli and the Florentine Renaissance*（1929）はその第二弾。

法学部で法哲学の初代専任担当者になった尾高朝雄（1899-1956）の最初の著書は、ウィーンで刊行された *Grundlegung der Lehre vom sozialen Verband*（社会団体に関する学の基礎づけ、1932年）であった。また、文学部倫理学科の教授であった和辻哲郎（1889-1960）による『風土』（1935年）は、戦後に英語訳が出版されている。

服部宇之吉著、鄭子雅訳『儒教與現代思潮』（上海、商務印書館、1934年）

*The Mythology of All Races, Vol.8* (Archaeological Institute of America, 1928)

矢代幸雄 *Sandro Botticelli and the Florentine Renaissance* (The Medici society, 1929)

尾高朝雄 *Grundlegung der Lehre vom sozialen Verband* (J.Springer, 1932)

和辻哲郎著、Geoffrey Bownas 訳 *Climate : A Philosophical Study* (Printing Bureau, Japanese Govt. , 1962)

自分の専門分野である日本政治思想史にも、英文著書が海外もしくは国内で出版された例が少ない。丸山眞男、渡辺浩<sup>49</sup>先生は本学法学部に所属した先達。社会科学研究所

---

<sup>47</sup> 京師大学堂。1898年創設、北京大学の前身。

<sup>48</sup> 姉崎正治（1873-1949）関東大震災直後に附属図書館長に就任（1923-1934）、図書館復興に尽力した。

<sup>49</sup> 渡辺浩（1946-）



で教授・所長を務めた石田雄<sup>50</sup>先生に関しては、ここに紹介する英文著書（同じ題名の日本語著書とは内容が異なる英訳論文集）のほかに、還暦と東大退職を記念した論文集、Gail Lee Bernstein and Haruhiko Fukui (eds.), *Japan and the World : Essays on Japanese History and Politics in Honor of Ishida Takeshi* (1988) が、英米両国で刊行されている。大久保健晴氏は長年の研究仲間で慶應義塾大学教授。総数は韓国語や中国語への翻訳も含めれば、さらに多くなるはずである。

丸山眞男 *Thought and Behavior in Modern Japanese Politics* (Expanded ed. London ; New York : Oxford University Press , 1969)

(Ivan Morris 訳、原著『現代政治の思想と行動』上下、1956-1967)

*Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan* (University of Tokyo Press , 1974)

(Mikiso Hane 訳、原著『日本政治思想史研究』1952)

石田雄 *Japanese Political Culture : Change and Continuity* (New Brunswick, N.J. : Transaction Books, 1983)

渡辺浩 *A History of Japanese Political Thought, 1600-1901* (International House of Japan , 2012)

(David Noble 訳、原著『日本政治思想史[十七～十九世紀]』2010)

大久保健晴 *The Quest for Civilization : Encounters with Dutch Jurisprudence, Political Economy, and Statistics at the Dawn of Modern Japan* (Leiden : Global Oriental , 2014)

(David Noble 訳、原著『近代日本の政治構想とオランダ』2010)

---

<sup>50</sup> 石田雄 (1923-2021)

## 荻部直 東京大学附属図書館副館長 略歴

- 1965 東京都北区に生まれる
- 1988 東京大学法学部卒業
- 1994 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了、博士（法学）
- 1996 東京大学助教授 大学院法学政治学研究科・法学部
- 2006 東京大学教授 大学院法学政治学研究科・法学部
- 2006 サントリー学芸賞受賞 『丸山眞男 — リベラリストの肖像』（岩波新書、2006年）
- 2011 毎日書評賞受賞 『鏡のなかの薄明』（幻戯書房、2010年）
- 2021 東京大学附属図書館副館長

発行日：2022年5月10日

編集：東京大学総合図書館

展示・イベントワーキンググループ

発行：東京大学総合図書館

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

電話 03 (5841) 2640 E-mail lib-tenji@lib.u-tokyo.ac.jp